

学長告辞

本日ここに、平成22年度、麗澤大学学位記授与式、ならびに別科日本語研修課程修了式を挙げるにあたり、麗澤大学を代表してご挨拶申し上げます。

はじめに、東北地方太平洋沖地震による計画停電のため、交通機関が甚大な影響を受けている中、ご来賓をはじめ、関係各位のご臨席を賜りましたことに対し、心より厚くお礼申し上げます。

また、これまで卒業生、修了生の皆さんを支え、この日を待ちわびておられたご家族、保証人の皆様のお喜びもひとしおと思います。残念ながら、本日、学位授与式に参加できない方々にも、この場から、心よりお祝いを申し上げます。

さらに後援会、麗澤会をはじめ、多くの関係者の皆様方には、日頃から本学の教育・研究活動に対し、深いご理解とご支援を賜っておりますことにも、厚く御礼申し上げたいと思います。卒業生および修了生の皆さんがめでたく喜びの日を迎えられたのも、数多くの恩人の方々のお陰でございますので、この機会をお借りし、ともに感謝の気持ちを捧げたいと思います。

さて、今年度は、外国語学部・国際経済学部の両学部で526名に学士の学位を、大学院では4名に博士の学位を、27名に修士の学位を、そして別科日本語研修課程44名に修了証書を授与いたしました。したがって、本年は、総数601名の卒業生と修了生を送り出すこととなります。さらに、海外の提携校から留学されている特別聴講生も16名が無事本学での留学を終了されました。

本日、卒業および修了された学部生、大学院生、別科生、特別聴講生の中には156名の外国人留学生が含まれております。出身は16の国と地域でありまして、それらを五十音順に紹介いたしますと、アメリカ、インド、オーストラリア、シンガポール、スリランカ、大韓民国、台湾、中国、ドイツ、バングラデシュ、ブータン、ベトナム、香港、マレーシア、ミャンマー、モンゴルとなります。留学生の皆さんは異なる言語、文化、習慣の壁を克服して見事学位記と修了証書を取得されました。これまでの皆さんのご努力に対して深く敬意を表します。

さて今回の学位記授与式は、先ほども申し上げましたように、東北地方太平洋沖地震の被害が日増しに拡大する中で開催しているわけでございます。実際、本学の卒業生の中にも、今回の震災で家屋が全壊している学生もおりますので、心を痛めております。まず、

この場をお借りしまして、高いところからではございますが、本学の学生と関係者をも含め、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、被災地におきましては、日夜を問わず被災者救助や災害対策に全力で取り組んでいらっしゃる関係者の方々に敬意と感謝の意を表し、かつ一日も早く日常生活が取り戻せますよう、心よりお祈り申し上げたいと存じます。

今回、未曾有の大地震に見舞われた被害報道がマスメディアを独占する一方で、69を超える海外の国と地域から救助隊員・救援物資などの支援申し入れがあり、現在も増え続けているという朗報も耳にします。また草の根レベルでも、ツイッターなど、インターネットを通じて、日本中はもとより、世界中から祈りのメッセージが届いています。たとえば、“Japan we are with you.”（日本の皆さん、私たちはあなた方と共にいます）“You are not alone.”（あなた方は独りではありません。）“We love Japan. Pray for Japan”（私たちは日本が大好きです。日本のために祈ります。）といった応援メッセージが続々と寄せられているのです。

また先月22日に大規模地震に見舞われたばかりのニュージーランドからも、日本に救助隊48人を派遣するという援助の申し出がありました。キー首相は「日本は私たちの惨事に多大な支援をしてくれた。友人である日本国民のために、今度は私たちが必要なあらゆる支援を提供する用意がある」と表明したそうです。

この声明は、災害時における経済的援助だけではなく、善意に基づく国際的な関係性の大切さを私たちに教えています。本日は、そのような国境を超えた人と人とのつながりの大切さを示すエピソードをお話して、学位記を授与された皆様へのはなむけの言葉にしたいと思います。

これからお話しするエピソードは、明治時代の海難事故についてでございます。1890年、トルコのフリゲート艦エルトゥールル号が、紀州沖の熊野灘で暗礁に乗り上げて遭難し、オスマン提督以下乗組員587名が死亡するという大惨事が起こりました。しかし、不幸中の幸いとも申しましょうか、付近の住民の献身的な救助活動により、69名の乗組員が救出されたという実話でございます。どうしてこのような昔の話をするかと申しますと、当時の日本人の善意が、その後の両国関係に影響を及ぼし続け、平成の時代になっても、善意が善意を生む連鎖反応が続いているからでございます。事故当時、串本地域の食糧事情はとても厳しい状態にありましたが、大島村の村人たちは、負傷者を運搬したり、医師の手助けをしたり、食事の世話をしたりと、懸命に救出・支援活動を行いました。

このエルトゥールル号事件は、それから95年後、イラン・イラク戦争の最中に再び脚

光を浴びることになります。その戦争中の1985年3月17日、イラクのフセイン大統領は、イラン上空を航空禁止区域とし、上空を飛ぶすべての飛行機を無条件に攻撃するという、とんでもない声明を出しました。この声明により、テヘラン空港で立ち往生したのが、在留邦人とその家族たちでした。両国で爆撃の応酬が続く中、イランの在留外国人は次々と出国してゆくのに、日本から同空港に乗入れ機のない在留日本人は、自国民を優先する外国の航空会社から搭乗をとり消されたり、拒否されたりして動きが取れず、パニック状態になっていました。

そのような中、日本政府に先駆けて、取り残された日本人を救出するために、DC10の大型救援機を2機も出してくれたのが、トルコ共和国でした。このトルコ航空機のお陰で、215名の在留邦人が全員無事にイランから脱出できたのです。日本は、飛行機の乗組員の安全が確保できないからと言って救援機の派遣を躊躇し、トルコは、日本人の安全が確保できないからこそ救助が必要だと言って救援機を派遣したのです。

では、なぜトルコが、イラン在留の日本人のために救援機を差し向けてくれたのでしょうか。それは 当時、この事件の最高責任者として英断を下したトルコのオザル首相が、「我々は、あなた方日本人に恩返しをしなければいけない」と語ったように、首相の脳裏には、あのエルトゥールル号事件で日本に助けられたという恩義の念が去来していたからに違いありません。

その後も、日本とトルコを結ぶ善意の連鎖は途切れることはありませんでした。1999年8月17日、トルコ北西部で大地震が発生しました。死者は阪神淡路大震災の約3倍の1万7千人を超え、負傷者も4万4千人を数えたといわれていますので、現在の東北地方太平洋沖地震はそれ以上かもしれないが、まさに大災害でした。そのとき、真っ先に義損金募集に立ち上がったのが、トルコ航空機で救出された日本人の人々でした。日本政府の対応も迅速で、百万ドル相当の緊急援助物資と、同じく百万ドルの無償資金協力を申し出ました。さらに9月23日には、海上自衛隊の輸送艦「おおすみ」、掃海母艦「ぶんご」、補給艦「はせや」が、被災者用の仮設住宅500戸を積んでトルコ共和国へ出発しました。その時、輸送艦「おおすみ」の艦長は、つぎのような訓示を乗組員に与えたといえます。

「トルコ共和国は、イラン・イラク戦争のおり、危険もかえりみずに2機の航空機を派遣し、テヘランに在留していた邦人215名を救出してくれた。日本は、今こそ、トルコの恩に報いなければならない。トルコのひとびとの友情に、こたえなければならない。われわれは仮設住宅をトルコに届けるとともに、震災からの復興を支援する。われわれがトルコに恩返しすることによって、こののち百年、日本とトルコとは友愛によって結ばれてゆける。日本が苦しいときにはトルコが、トルコが苦しいときには日本が、どのような困

難が待ち受けていようとも、先達が残してくれた日本とトルコの絆を断ち切ることがあってはならない……」。私はニュージーランドのキー首相の声明を聞いて、このエピソードを思い出したのです。

今回の地震は、復旧するには大変な支援と尽力とが必要される大災害です。また今回の地震も含めて、これから皆さんが巣立ってゆく実社会では、順風満帆の時ばかりではなく、悲しみや苦しみ、そしていろいろと困難な出来事に遭遇するでしょう。しかし、そのような時でも、いや、そのような時であるからこそ、相手のことを思いやり、お互いに助け合い、励まし合って、ともに苦難に立ち向かっていくことが必要なのではないのでしょうか。J・F・ケネディーが大統領就任演説で言った言葉、“Ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country.”（「国家があなたたちに何ができるのかを問うのではなく、あなたたちが国家のために何ができるかを問いなさい」）を思い出すのは、今かもしれません。未曾有の災難に見舞われた日本国のため、そして世界のために、私たちがお役にたてることは何かを自らに問いつつ、お互いに協力しあい、助けあって参りましょう。

最後に、米国では「卒業式」のことを“commencement”とも申します。“commencement”とは「開始」「始まり」という意味です。つまり、卒業とは新しい人生の始まりでもありません。これからは、常に希望を持ち、どんなことがあっても自分の足で邁進されますように、そして「日々に孜孜、日に新たなり」という麗澤スピリットを忘れませんように。

今後とも皆さんが、本学でこれまでに習得された学識と道德観・倫理観を存分に活かして世界で活躍されますよう祈念し、また、麗澤大学のさらなる発展のため、麗澤会、同窓会活動などを通じて、今一層、母校をご支援くださいますようお願い申し上げます、ここに告辞といたします。

平成 23 年 3 月 14 日

麗澤大学学長 中山 理